

日本統治時代台湾産バナナの海外搬出

松 浦 章

要 旨

台湾の特産品の一つにバナナ、香蕉がある。そのバナナが台湾の日本統治下においてどのように日本を含め海外に搬出されていたかについては詳しく知られていない。台湾産バナナの特産地は台中地域であり、基隆と高雄から日本へは神戸、横濱、大阪へ、中国本土では天津・東北方面、上海以南の沿海部と香港や廣東へ汽船によって輸送された。

そこで本論文において日本統治時代の台湾産バナナの海外搬出がどのようなものであったかを明らかにするものである。

キーワード：日本統治時代 台湾 香蕉 バナナ 海外搬出路

1 緒 言

『臺灣日日新報』大正12年（1923）7月16日付の「臺灣及び臺灣中心の航路 東西南北縦横の航路網を見よ」によると、台湾の地理的状況からの特産品が掲げられている。

臺灣としえば唯年中暑苦しい所のように考えられているが、そは大の間違いで、到处年中緑深き色もて彩られ、盛夏の頃に於てさえ却って内地の都会などより住心地がよい位である、南端の恒春辺りですえ最高温度九十三度位、深山より送る風も涼しく、其名の示す如く恒に春の気分が漲っている、尤も南国だけに一年を通じては内地より暑いのは勿論であるが春夏秋冬野も山も濃厚なオリーブ色で染められ、年中花が咲き、お米が二

度獲れる、味の善いバナナやパイナップル、文旦、蜜柑、西瓜其他熱帯珍果を沢山に産する。人口三百七十万（内地人十七万）統治は内地延長主義を緯とし共存共栄を経とし、社会生活の天国を理想とし教育衛生思想よく普及し文化の程度は殆んど内地人と異ならないまでに至っている、交通は命令航路、築港、鉄道、私設軌道等完備し殊に都会の道路の如きは非常に立派で、内地人観光園が内地都会の悪道路に顧み喫驚する程である、近年地方制度が改正せられ、州市街庄に協議会を設け自治の道程に進みつつ島民挙って善政を謳歌している。（下略）¹⁾

とあるように、台湾では多くの熱帯果物を産出し、その中に「味の善いバナナ」も含まれていた。

1930年10月に臺灣総督府殖産局が発行した『臺灣の芭蕉産業』の沿革によれば、本島芭蕉實の内地移出は明治三十六年基隆の商人が神戸に移出してるを嚆矢とす。其の當時の移出芭蕉實は臺北州の産にして、現在に於けるが如き優良品にあらず。其の數量も亦僅少なりき。其の後、明治四十一年臺中の商人が相當多量の移出を試みたるが、大に内地の嗜好に投じ需要急速に増加せしかば、初めて世人の注目する所となり、多數の移出商人簇出し、移出高逐年増加するに従ひ益栽培發達して生産量愈増加するに至れり²⁾。

と記述しているように、日本に商品としてのバナナがもたらされたのは1903年（明治36）年であるとされ、台湾の基隆港の芭蕉商人あつた都島金次郎が日本郵船会社の西京丸に7籠を搭載させ神戸に送つたとされている³⁾。

とあり、1903年（明治36）に日本へ初めて台湾産バナナがもたらされたとされる。

1943年（昭和18）年に臺灣青果同業組合聯合會から出版された臺北帝國大學助教授であつた中村三八夫⁴⁾が著した『南方圏の熱帯果樹』に、

バセウ屬（Musa）の植物で可食の無核果を生ずる種類を總稱してバナナ又は食用バナナと云ふ⁵⁾。・・・バナナは熱帯到る處に分布し其起源は詳ではないが熱帯亞熱帯を以て原産地となす説が有力である。果實の腐敗し

易い関係から自給自足の産業に留れる箇所が多い。然しカリブ海に沿ふ中央亞米利加の地域一帯、カナリー島及び臺灣は輸出バナナの生産地として世界に名高い。臺灣は日、滿、支への輸移出を主とし毎年1,200~1,300萬圓内外の生産高を示し年輸出價格は1,600萬圓を越へて居る。本島（臺灣）農産物中、甘蔗に次いで重要なもので、臺中、高雄、臺南の3州を主産地とし、就中臺中に多い⁶⁾。

とあるように、台湾産のバナナとりわけ台中産のバナナの生産量が多く、20世紀前半期には日本を中心に東アジアに搬出されていたとされる。

バナナについて中村三八夫は、

バナナの原産地は明かでないが、熱帯アジアを發祥地とする説が有力である。熱帯至る所にみられるが、果実が腐敗しやすい関係から、自給自足的産業にとどまる地が多い。しかしカリブ海に沿う中央アメリカの地域一帯や台湾などは、輸出バナナの産地として世界に名高い⁷⁾。

と記しているように、アジアでは台湾が輸出バナナの産地として知られていた。

『臺灣日日新報』第7948号、大正11年（1922）7月14日付の「食物談」に「香蕉之價值」に、香蕉、バナナの記述が見られる。

香蕉俗名香蕉，支那産於粵省者爲佳，蓋此物爲熱帶地方之特産也。其書類頗多，故大小色香亦各不問。此果所含物質，多炭輕類熱帶之人，每代五穀食之，据研究此物者計算，香蕉之地一畝，所出養人之食料，過於種麥或種他穀一畝。故香蕉未可僅以奢侈物目之，實亦大宗食料也。香蕉之外皮堅厚故肉部不致爲微生物黴菌等所侵，倘外皮不壞，食之斷無碍於衛生也。外皮之重，約及一蕉百分之三十五。蕉之灰質，大部分爲磷化物，硫化物，炭酸加里，蘇打鎂，與石灰質，均屬養生所必要之物，人身營養所必需之物，香蕉中備具之，誰所含蛋白質與脂肪不及炭輕質之多耳。若與牛乳同食，比例得勻。或與少許肉食同用，即足以養身，而有餘將香蕉用化學法分解，知其功用與過蕃薯大抵相同，而其燃燒與食料之價值，則超蕃薯百分之二十，至若牛乳，蕎麥，介類，魚類蔬菜等，則皆不能及之，持香蕉與肉類比較則肉類富於蛋白質，爲發達筋肉之品，香蕉則多生熱力，人身譬如機器，蛋白質

所以抵袖機器之損毀，炭輕質所以使機器運行不息也。香蕉含炭輕質多，而亦含有蛋白質，故常食香蕉，勝於獨食魚肉，以賣價論，香蕉亦賤於魚肉，而所含有用之食料則過之。常食生魚，含水百分之八十一至八十二，香蕉僅含百分之七十五又十分之二，魚之蛋白質較富，而脂肪較少，炭輕質則絕無，其不及香蕉明矣。香蕉不特生熟，且多含鹽類之物，較洋葱更多而可貴，熱帶地方之人，有將香蕉晒乾，磨之爲粉，備不時之需者，未熟之香蕉，或不先煮過，不易消化，已熟之香蕉，則容易消化，故一時食盡三數枚，亦無碍於胃納也⁸⁾。

台湾におけるバナナは古くは甘蕉と呼称され、中国では廣東省において良好な物が生産されていた。このように香蕉は熱帯産の特産である。その栄養価が高いことから、食品として優れていたとされた。

この香蕉は台湾において『時事新報』東京、大正元年（1912）9月17日から10月1日までに掲載された筆名一色生の記述の中に「(三)台湾の市場に見られる」として、

……台湾の市場は要するに日曜諸品販売所なり。此市場には牛肉あり豚肉あり魚肉あり。葱大根茄子は勿論のこと梨・林檎・バナナの果実に至るまで日々台所に於て無くては叶わぬ殆んど総てを網羅して余す所なければ、何人も日々此市場に出入せざるものなし。故に如何なる富貴の主婦も苟くも台湾に生存する以上は市場を最も能く利用するを専一と……⁹⁾

とあるように、台湾ではバナナは日常の生活を潤わせる安価な一般的な果物として利用されていた。

この香蕉が台湾から東アジア世界にどのように搬出されていたかを明らかにしてみたい。

2 台湾におけるバナナ

『臺灣日日新報』第6435号、大正7年（1918）5月23日付の「臺中特訊」には、バナナの漢字名の香蕉に関する記事が見られる。

▲香蕉之組合 數年來本島産香蕉，移出内地者益見增多，而香蕉産地，以

中部地方爲最適宜，故其産額，比他處尤盛，者番移出業者等，爲圖營業上之統一，及福利之均沾，特於東勢角地方開設販賣組合，去十五日舉行開業式，極呈盛況，已見前報告，當日出席者約六七百名，將來營業上方針，擬依組合規條，共謀發展臺中街小室辯護士，被聘爲同盟組合顧問，爲之運籌決策云¹⁰。

台湾産の香蕉すなわちバナナの産地は中部地方が最適の地とされ，産額も最も多いのであった。

1940年2月に臺中州青果同業組合が発行した『臺中バナナ』¹¹がある。その冒頭で，

臺灣と云へばバナナ，バナナを見れば臺灣を想ふ程バナナは臺灣の名産になつて居ります。



南の端の臺灣産のバナナが樺太の賑かな晩餐の卓を飾つて居る今日です。北支北満の冬，赤いストーブを囲んで姑娘達は臺灣産バナナの皮を度しく剥いて居ります。それ程臺灣のバナナは行き渡つてをります。都會の心あるお母様達は可愛い、愛児達のおやつに臺灣産のバナナを用意してをります。それ程臺灣産のバナナは營養に富んで居ります¹²。

と見られるように，臺灣産バナナは20世紀前半の東アジアでは広く知られた果物ではあったが，その主たる産地は台湾であり，それらが広く東アジアの地域にもたらされていた。

『臺灣日日新報』大正9年（1920）11月12日から11月17日に掲載された桜井農学士談「臺灣熱帯果実（一）」によると，

本篇は督府農務課桜井学士の研究になるものにして氏は実に熱帯果実を専門に研究し，先程北海道大学を出てし人にして台湾の果実に就ては殊に瀛

奥を極めたる人なり

(一) 芭蕉実

熱帯の果物には多くの種類があるが、何れもその登熟した時の香味は、温帯果実などの到底及ぶものでない、壮快な芳味を有するものである、未熟な果実の澱粉質が漸次糖化して、又糖分の醗酵の途次に斯くの如き芳香を出すものであるが、此等の登熟作用は頗る微細なもので、又迅速な醗酵速度を有する故、多くの熱帯果実は単にその産地に於て消費せられて居る間は、価格は廉で生産額は決して上らないものであって、文化生活の進んだ温帯本国に移出して、初めて熱帯果実の価値は急増するのである故に世界列強の多く所有して居る各熱帯植民地に於ける果実の輸送機関が、よく統一して居る所程熱帯果実は一大産物として非常な勢いを以て、集約的に栽培されて来るのである、我が台湾のバナナの如きは最近の発達であるけれども内地本国の生活改造に向いつつある大消費を控えている故、又我台湾と競争し得る国の無い為め、バナナの大量生産という事は絶対的であって、実に本島果実中の大宗である、去年数年間に内地本国に移出せし数量は次の通りである。

大正元年	8,305,620斤
大正二年	12,317,620
大正三年	17,593,100
大正四年	20,355,800
大正五年	40,415,800
大正六年	47,320,020
大正七年	41,020,740
大正八年	46,377,060

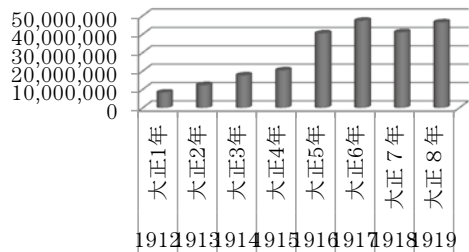


図1 1912—1919年台湾産香蕉日本へ移出斤数

価格としては年額既に二百万円を突破し、内地市場の嗜好を喚起して居る。且つ栽培が比較的商売で有利であるから、輸出は通増を示して行く傾向はあるが、夏季の台風害で産額に甚しく高低を示して居るが、市価は斯くの如き場合逆比例して、高騰するの弾力性を有して居る。バナナの原因地は

南亜細亜に於ける酷暑の森林地であって、薫風香る樂園に培育されて来たもので、其の生育の様を見ても如何に熱帯植物であるかが知られる。大面積を有する濃緑の葉は、弱風にさえもその平行して居る葉脈を裂かれ、薄弱な根は肥沃な森林の壤土を揺籃にして居るを思わしめるものである¹³⁾。とあるように、台湾産バナナが海外とくに日本国内へ移出されたのであった。ここで提示された移出数量を大正元年（1912）から大正8年（1919）までの数字をグラフにすると図1のようになる。

さらに『臺灣日日新報』大正9年（1920）11月12日から11月17日に掲載された桜井農学士談「臺灣熱帯果実（三）」、「芭蕉実（続）」に、

バナナには品種として百数十種も知られているが、中には蔬菜の如く生食し得られない品種もある。我台湾には北蕉、彩蕉、木瓜蕉、紅蕉等の土産種があるが大別しては支那種に属するものであろう。何れも支那移民の徐々に斉したもので、及び馬來群島より渡来した品種である、世界の産額に比しては我台湾島産のバナナの如きは微々たるもので、年々数百万房のバナナは大半は温帯の各文明国にて消費され、残額は熱帯地土人の常食として実に重大なる使命を果し食料問題を不識裡に緩和して居るものである。一般にバナナの苗は旧暦の二月の清明の日を期して移植されているが、氣候順調で栽培管理宜しきを得ば、満一箇年で翌二月頃に結実収穫し得られるものであるが、総ての条件の不同の爲め自然に此収穫の期日は遅れて、これが一果樹園に斯くの如き現象を呈して来て、バナナは年中収穫せらるるに至るものである。気温の関係でバナナの花序が偽茎の先端より抽出開花し初めてから、青果物として内地に移出さる可く、未熟の青バナナを収穫する迄の結実日数は、真夏の盛りには七十日を要し、最寒の二月には百七十日も要するのである。

数年前より組織された中部台湾青果物移出同業組合は、主にバナナを扱って居るが、月数回の内地に発航する汽船は、不絶幾千籠を積載して行っている。出帆の二三日前各地の青果物市場へ何百の土人生産者が数房の青果を担入して市場内に群集し、之を羅列して仲買人と買直の折衝をしている。

其光景は実に壯観である。市価は毎月変化して行くが、年々其変化は一定の周期を呈している。一般に内地に於て冬季が終りて、総ての果実の欠乏し市場閑散なる三四月頃には、最も高価を示し百斤十円台を突破する事もある。又収量の極大なる夏期には二三円の事もある。概して諸物価と共に漸次騰貴して行く事は事実である。台湾のバナナ一房は約五十斤であつて、之を各段に截り離して一等二等三等品と等級別にして、約六十六斤入りの籠に入れ、之を鉄道便汽船便に依り内地市場、下関、神戸、大阪東京、京都等に搬出され、各問屋より小売屋に分割されるのであるが、事實は簡単の様であるが商業上の内容に至つては複雑極まるものである、生産地の紛争、仲買同業者間の軋轢、市場の不整理、運輸機関の不統一、内地商人との連絡不一致等の如き、緯となり経となつて紛争し、事実上バナナの生産額に多大の損害を蒙っているのである。(中略)

又バナナの澱粉としても、他の穀類の澱粉よりは早く消化され得るのは、確にバナナの果実内には優良な酵素のある事を示すものである、猶果肉の醗酵作用を利用してバナナ酒、バナナ酒精、バナナウイスキー等が醸出され居る、生食して清楚な食後のデザートとしては、簡にして要を得たる果実であるは云うを俟たない、バナナの偽茎は果実は果実収穫後切り倒して終うのであるが、労働力の容易に得られる所では、此れより優良な纖維を得られ、芭蕉布として広く知られているものであるバナナ以外台湾の熱帯果実として経済上の関係の大なるものは柑橘竜眼、鳳梨等であつて、総督府の統計に依ると、その年産額は次の通りである。

種類	数量	價格
柑橘類	9,946,153斤	438,296円
龍眼	12,733,499	380,096
檸檬	15,958,604	311,514
柿	1,362,766	25,893
李	2,242,653	69,976
桃	425,092	26,041

日本統治時代台湾産バナナの海外搬出（松浦）

鳳梨 7,903,670 358,179
 芭蕉實 51,609,895 1,483,751¹⁴⁾

とあり、これらの数値を表示すると図1、2のようになる。

このように台湾における芭蕉實バナナはその生産量と生産額共に台湾を代表する果物であった。その一部が「台湾のバナナー房は約五十斤であって、之を各段に載り離して一等二等三等品と等級別にして、約六十六斤入りの籠に入れ、之を鉄道便汽船便に依り内地市場、下関、神戸、大阪。東京、京都等に搬出され、各問屋より小売屋に分割されるのであるが、

事實は簡単の様であるが商業上の内容に至っては複雑極まるものである」とあるように、台湾バナナー房50斤（1斤=600gとして、30kg）を等級別にして一籠約66斤（約40kg）に入れられ、日本へ汽船航路によって下関、大阪、東京などへ搬出されていた。

その状況の一端が『臺灣日日新報』第9340号、大正15年

（1926）5月6日付に「バナナの船出」として掲載されている。写真下の記事に「臺灣中南部から集るバナナは寫眞の様な籠に入れられて山と積んで船で内地へ仕向けられるが、之が船會社の重要な貨物の一。寫眞は基隆港の岸壁積出しの光景」とある。

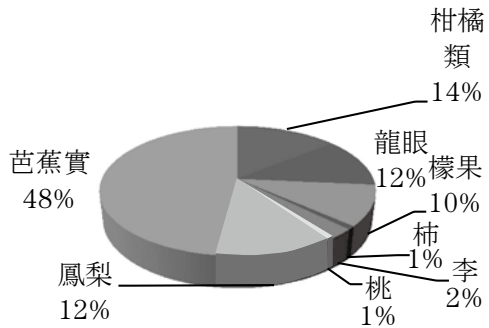


図1 台湾果物生産額比

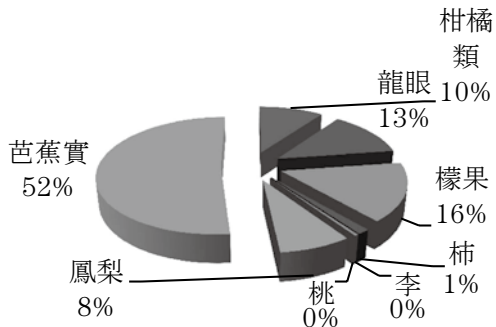


図2 台湾果物類生産量比



出船のバナナ

同紙の同日の記事に「バナナの一
等品はみな内地送り 臺灣では旨い
のが食べられぬ 生産されて船積み
し 内地消費者の口に入る迄」の記
事に、台湾産バナナの日本への移出
事情が知られる。

民衆の果實と銘打った臺灣の芭
蕉即ちバナナは内地では一番果
実の拂底する冬から春、夏から

秋、一年中を通じて上は帝國ホテル、三越、白木屋の食堂から一流所の水菓子屋の店頭を美々しく飾ることは申すに及ばず、凡そ如何なる場末の三文八百屋の店先にも常に発見されて熊公八公の味覚を満足される程、しかく事ほど左様に我が臺灣産の芭蕉は内地人の口に膾炙されてゐる。然らば生産から消費まで一如何にして皆様の味覚を満足させる様になるのか一芭蕉は臺灣ではどんな山奥にも静か伏屋のむさ苦しい空地にも栽培される。然し最近では大量生産の集約農法が漸次擡頭して主産地である臺中州の如きは凡そ山と云ふ山は悉く傾斜面を利用した一面の芭蕉畑である。勿論立派な上水田にも植られて美事な結實をするが、今では蓬莱米の爲め壓迫されて、芭蕉園は漸次奥へ奥へと深く分け入り、臺灣人の勤勉さがあらゆる未開な山地を開拓して進む。芭蕉は一年一回結實し仲には一株で三十斤、五十斤と云ふ現状に接續した大房が幹もたわゝに實る。さうして古株が結實する時には既に新しい芽がふき出し一年後には春夏秋冬に遠慮なく新しい實が生産される。生産者は木で熟する以前に之を切取つて擔だり、又は臺車で青果同業組合經營の検査所に搬入する。検査所では専門の検査員が居つて、一、二、三等、等外品により分ける。一、二、三等は島外品即移出品である。等外品とは不合格品で移出することを許されず、島内消費に當てるから俗に島内品とも呼ばれてゐる。島内品は不良品が過熟して内地輸送に不堪ものばかりである。従つて米の資産者である百姓が甘い米を賣

日本統治時代台湾産バナナの海外搬出（松浦）

つて悪い米を常食するやうに本當に味の好い芭蕉は臺灣では食へず内地で食べる。さて合格品は皆百斤づつ竹籠に荷造りして基隆、高雄の兩港に陸送する。茲で船積して愈々内地行きとなるので、現在の内臺航路の芭蕉積船は通風その他の充分の設備をしてゐる。斯うして門司、神戸、横濱等の岸壁に著くだけではまだ皆さんの口舌の求には應じられない。この積荷は東京、横濱、京都、大阪、神戸、門司にある荷受組合の手に渡り、荷受組合では競で仲買人に賣捌く。仲買人は更に問屋なり小賣人に轉賣して愈々皆様のお目通に適ふと云ふ順序だが、尤も市場に出るときは臺灣育ちの眞青な外皮を化粧して室で色附けし、御覽の通り風味香しき色艶となるのは云ふまでもない。この外に青果同業組合、青果會社、同業組合聯合會と云ふ複雑した取引機關や賣つた買つたの取引の呼吸、さては輸送の苦心談、失敗談、歴史等バナナに就いて丈へでも随分面白い話が澤山ある¹⁵⁾。

バナナこと芭蕉の生産から搬出まで述べられるが、台湾産の一等、二等、三等などと等級が与えられたバナナは日本国内へ搬出され、それ以外の等外品が台湾の人々の食卓にのぼっていたのであって、台湾では等級品を食するのは困難であった。

このバナナが日本統治時代の台湾からどの地域に海外搬出されていたのだろうか。

3 日治時代台湾産バナナの海外搬出

1) 日本への移出

日本バナナ輸入組合が発行した高木一也著『バナナ輸入沿革史』によれば、

バナナが初めて日本内地に移入されたのは明治三十六年で、基隆の商人が神戸に持ち込んで来たものである。その当時の移入バナナは台北県産のものであったが、品質は現在のような優秀のものではなかった。

日本に商業用バナナとして多量に移入されるようになるようになったのは、明治四十一年以降のことである。その後、逐次台湾バナナは日本全国に普及され、昭和十二年には年間三一二万籠（約一四万トン）（一籠正味

表1 1912-1921年台湾産バナナ日本移入数量（籠）

西暦	日本暦	数量（籠）	西暦	日本暦	数量（籠）
1912	大正元	141,341	1922	大正11	1,304,334
1913	大正2	117,582	1923	大正12	1,667,742
1914	大正3	195,478	1924	大正13	2,437,558
1915	大正4	249,244	1925	大正14	1,779,402
1916	大正5	435,339	1926	昭和元	2,644,611
1917	大正6	666,269	1927	昭和2	2,117,996
1918	大正7	624,383	1928	昭和3	2,276,886
1819	大正8	613,383	1929	昭和4	1,710,142
1920	大正9	184,644	1930	昭和5	2,198,174
1921	大正10	580,753	1931	昭和6	2,198,174

四五・三六キロ入り）も移入され、バナナはその当時日本国中至るところの街頭に氾濫し、夜店のたたき売りにまで姿を現わし、安くてうまい大衆果実として、一般消費者に親しみ愛された¹⁶⁾。

と記されているように、台湾バナナが日本へ流入したのは明治36年（1903）であり、台北産の普通品であるとされ、恒常的に流入するのは明治41年（1908）以降で、昭和12年（1937）年には312万籠、14万トンが移入されていたとされる。

大正年間から昭和初期にかけて日本に移入された台湾産バナナの数量¹⁷⁾は次の表1のようになり、その推移は図3に示した。

1940年の臺中州青果同業組合が発行した『臺中バナナ』に日本への輸送について知られる。

……内外地仕向のものは基隆、高雄の南北兩港から毎月七回乃至十數回積出して居ります。基隆から

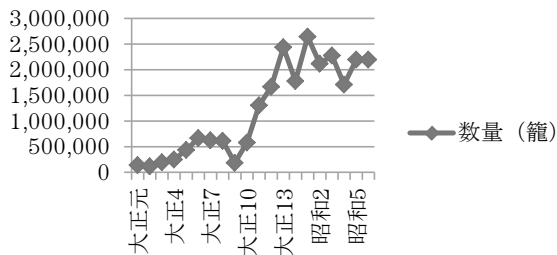


図3 1912-1931年台湾産バナナ日本移入数量（籠）

日本統治時代台湾産バナナの海外搬出（松浦）

は郵商船のメール船たる一萬噸級の巨船が基隆神戸間を三晝夜で運んで居りますし、高雄からは矢張り郵商船の四五千噸級の高速貨物船が高雄、芝浦間を四晝夜で直航して居り、その他北支、中支、南支、満洲へも夫々、配船をして送つて居りますが全部「フルーツボート」たる職能上船會社でも快速船の配船に専念して居り各船共船艙に特殊の換氣装置を施し新鮮なるバナナの輸送に努力して居ります¹⁸⁾。

1940年頃には、基隆、高雄から日本に向けて毎月7-10回にわたって日本郵船、大阪商船の1万噸級の巨船が基隆から神戸へ3晝夜で輸送していた。高雄からも4,000級の高速貨物船が4晝夜で東京の芝浦まで輸送していたのである。

『臺灣日日新報』第9662号，昭和2年（1927）3月24日付の「沖繩バナナの割込計畫 品質は臺灣よりも劣る」によれば、

【大阪特電二十三日發】 從來本邦内地果物市場のバナナは殆んど臺灣産で獨占した。その内地移入高は年額約二百六十四萬籠，價格一千三百二十八萬六千圓に達してゐるが，最近に到り沖繩産バナナが市場割込みの計畫をなし，先般來沖繩當業者數ねが神戸に來たりて種々長沙をしてゐるが，現に運賃なども臺灣方は産地から直航の船便がありて噸當り約八圓である沖繩の方は一回鹿兒島で積替へを要し，其費用だけでも噸當り一圓二十錢見當を要するから今假りに沖繩阪神間を運賃五圓とするも接續費用共に六圓二十錢の入費となり，臺灣より安いけれども品質に於いて臺灣産より見劣りがするとの事であるから，可なり安値でない限り市場割込みは甚だ難事であると見られてゐる¹⁹⁾。

と、沖繩からも日本本土へバナナが搬入してきたいが、台湾産バナナに比較して品質が劣っていたようであった。

『東京朝日新聞』第14639号，昭和2年（1927）2月19日付の「一千萬圓による台湾バナナ移出」によれば、

昨年中における台湾の青果物移出高は一千三百十九萬六千六十圓，バナナ以外の物九萬二千三百十八圓，合計一千三百二十八萬八千三百七十八萬圓で、内もつとも産額の多い地方は台中の九百三十三萬三千九十五萬圓を筆

頭とす。なほ移出先のもつとも多きは東京の三百九十二萬八千二百九十七圓に次で神戸の三百六十萬七千九百七十九圓，門司，下關は共に各百萬圓台で，横濱，大阪はこれに次いでゐる。(台北電報)²⁰⁾

と見られるように，台湾産青果の日本への移出としてバナナが13,103,742円として全青果物の99.3%と，他の青果物を圧倒していた。その産地として台中が9,333,045円と71.2%の産出額を示し，そして台湾産バナナの日本移出の約30%が東京に，27.5%が神戸に搬出されていたことになる。おおよそ4割近くが関東に，6割ほどが関西以西に搬出されていた。

2) 朝鮮半島への搬出

『臺灣日日新報』10872号，昭和5年7月22日付の「自己生産のバナナを朝鮮や上海に捌く 目覚めが潮州の有力者 本春から公司を設立して」に，

本島のバナナ産業は近年益々發展を遂げ高雄州下の如きは從來のバナナの主産地たる臺中を凌駕せんとする勢を示し，本年の如きは臺中の生産豫想百五六十萬籠に対し，高雄は百二十萬籠と稱せられ，本年上半期の輸移出部は九十萬籠を突破するの好成績であるが，近來高雄州下の大生産者は大に目覺むるところあり。潮州郡内埔庄内の鐘幹郎，鐘壬濤氏は臺鮮物産公司を設立し高雄を本店として，釜山，京城，仁川などを支店とし，本年四月から營業を開始し，各支店に於て色附をなして販賣してゐるが，賣行頗るよく毎使最大量輸送をなしてゐる。又同じく潮州郡の鐘桂蘭氏はこれも本春から上海に粵商香蕉□□公司を設けて自己生産品を中心とするバナナの販賣をなしてゐるが，是亦好成績である。斯く大生産者が自己製品を自ら販賣するやうなにつたことは，斯界に取り最も注目すべき現象でこの結果が一般に良好であること判明せば，今後之に習ふもの噴出するには非ざるかと見られ，本島バナナ界のためには大に喜ぶべき傾向であるとされてゐる。尚ほ臺南州下は近年バナナの産額著しく原産し，本年の移出高は六萬内外とみられてゐるが，近來内海内務課長など熱心にこれが栽培を奨励し，其結果新たに一千甲歩の栽培を開始することとなり，目下著く實行

中であるから一、二年後には臺南州下の産額も激増することとなるであろう²¹⁾。

とある。高雄のバナナ商人が、臺鮮物産公司を設立し高雄を本店に、朝鮮の「釜山、京城、仁川」に支店を設置して營業を開始しようとしていた。

『神戸又新日報』昭和8年（1933）10月20日付の「満洲国の交通網確立への大評定 内、鮮、満、台の当局連参集し連絡運輸の会議」の記事に、

……台湾総督府交通局線とは現在貨物の連帯をなしおらざるも台湾線発朝鮮着バナナ類は漸次増加せるにつき、関釜間航路經由鮮鉄局主要駅着生菓に限り連帯運輸開始のこと²²⁾。

とあるように、台湾産バナナが朝鮮へ搬出される輸送路が見られる。台湾から下関へ運ばれ、下関で積み換えられ、釜山へ輸送される交通路があった。

3) 中国大陸への搬出

『臺灣日日新報』第13777号、昭和13年7月28日付の「將來のバナナ輸出百萬籠を目標に 満支朝鮮の販路視察 猪股青果會社常務談」によれば、

【基隆電話】台湾青果會社猪股常務は、二十七日大和丸にて來台したが、次の如く語つた。臺灣島の青果は臺灣青果會社に統制させると云ふ総督府の御方策に對し、我々關係門としてちとして居る訳に行かぬから、積極的に販路擴張出産増加に乗出す事となり。先づ現在の販路の状況を見たいと思つて、六月一日から上海を振出しに中支北支内蒙滿洲朝鮮と凡ゆる交通機關を利用して、重要都市二十一ヶ所のバナナに對する輸送機關等を具さに見て來た。上海は將來最も有望なところであるが、現在は未だ準備中に屬し、中支の南京、蘇州、滿洲の牡丹江等に□□市場や出張所を設け、又天津の荷受け組合を擴大強化して將來百萬籠のバナナを出したいと思つて居る。朝鮮の輸送についても直行がよいか、門司經由がよいか研究中である。冬季の包装に關しても餘程考慮を拂はねがならぬ点があると思つた²³⁾。

とあるように、台湾青果会社では台湾産バナナの販路拡大を企図し、中国への

販路拡大も考えていたことが知られる。

台湾青果株式会社は大正13年12月に半官半民の形態で設立される。当時の資本金150万円の3万株の内、6,000株は日本本土で、1万7千株は台中に、台南と高雄に3,500株を割り当てられた。同社の役員や定款の変更は台湾総督府の承認が必要であり、株式の売買、譲渡には会社の承認が必要であり、ある種の半官半民の会社であった²⁴⁾。

『臺灣日日新報』昭和9年(1934)4月30日付の「満洲市場と臺灣の青果物統制と幹旋機関次第で前途頗る有望」に見える次の記事には、

台北州梶原技師に昨夏満洲に於ける臺灣の蔬菜果実輸送状況並に需給関係を調査した材料に基き『満洲の蔬菜果実市場と臺灣との関係』なるパンフレットを公にしたが右に依ると満洲の十八主要都市に於ける一年の蔬菜消費額は六百八十万円と推定されている、此内どの位外国から輸入されるか数字を以て表わす事は困難であるが、最も大きな大連中央卸売市場の取引状況を見ると左の通りで大体の見当がつけられる(八年度は四月より七月迄)(中略)更に果実に就ては空気が乾燥している為頗る需要が多く昭和六年中の輸入果実は二百九万海関両(一海関両六十九銭)に達し蜜柑、リンゴ、バナナ、栗、胡桃核缶詰果実等が多い臺灣に於て有望と認められる果実は柑橘、バナナ、鳳梨、李、鳳梨缶詰等で就中柑橘は最も有望で大連中央卸売市場の取扱高を見ると昭和五年三万九千余円、六年十万三千余円、七年二十一万八千余円と著しい進出振りを見せている、蔬菜果実とも量に於ては敍上の如く甚だ喜ぶべき現象にあるが之まで出荷の統制を欠いていた為小からず価値を低下せしめていた、右に就ては州にて輸送試験を行い当業者を指導しているし当業者も大に覚醒し改善に努めつつあるが尚幹旋機関の設直、荷造法の統一、満洲市場との連絡、汽船会社との提携等研究実施すべき事項が頗る多く当業者一段の努力を望むと²⁵⁾。

とあるように、気候が乾燥する中国東北部での需要が高く、さまざまな果物とともにバナナも人気ある商品の一つであった。台湾から中国東北部への輸送には汽船が必定であった。

4 台湾産バナナの汽船輸送

これらの果物を搬出するのは汽船が必ず必要であった。

『臺灣日日新報』第8315号、大正12年7月16日、5頁に右の図が見られ「臺灣を中心とせる航路圖」とある。

この航路が台湾産の物産を輸送する航路でもあった。

『大阪毎日新聞』第15075号、

大正14年（1925）5月14日付の特集である「今日の臺灣」に見る「香り高いバナ、の國 その他の珍しい農産物が澤山」に記事に次のように見られる。

臺灣を旅行した人は、いたるところにバナ、の大きな房の下った芭蕉を見るであろう。山地へゆくと、野生の芭蕉すら澤山ある。四季を通じて常に花が咲いて實を結ぶのはただこのバナ、だけである。

今日では、臺灣全島にゆきわたってゐるが、臺中、臺南、高雄の各州は最も多く産し、年産額二億斤、價格一千万円といふが、いまではこのバナ、が臺灣航路の汽船の重要な貨物となっている。

門司や、下關の埠頭で売ってゐるバナ、が、東京、大阪邊りのに比べて安く、且つ美味なのは、臺灣航路の汽船によつて直接運ばれてくるからで、百目五六銭で買はれる。琉球や小笠原にも産するが、それは臺灣の二割にしか當らない²⁶⁾。

台湾産のバナナは海外に搬出されるが、必ず汽船による航運が必要であった。同時に台湾航路の汽船にとって重要な積載貨物の一つがバナナであった。

『中外商業新報』昭和6年（1931）3月7日-3月12日に掲載された「バナナ産業と移輸出状況（一）移輸出年額千百余万円砂糖、米と並び立つ」の「台湾経済界の重鎮」に、バナナの移出高が見られる。



屏東から老埤間、台中以南の鉄道沿線、二水駅から埔里社に至る山間、丘陵、路傍によくも植付けられたものと驚く程に芭蕉の林を見せつけられる。内台航路の船はバナナの出盛り期に入ると、腐敗を考慮して基隆出帆時刻を変更する。船会社が運賃収入の六割をバナナ輸送から挙げているというにおいては、出帆時間を変更する位のことは敢て不思議ではない。兎に角これで内台貿易にバナナが如何に密接な関係を結んでいるかが窺い知られる。台湾としても砂糖米につぐ重要産物の第三位を占め押しも押されもせぬ台湾経済界の重鎮たある。(中略)²⁷⁾

昨昭和五年中のバナナ輸移出高は二百二十九万七千六百十一籠、金額一千二百二十七万九千九百八十八円で前年に比し数量は五十万四千九百九十八籠の増加ながら、金額は僅二十六万一千三百円の増加に過ぎなかった、最近五ケ年間の輸移出高を示すと次の通りである(数量籠金額円)(中略)

右表の示す通り台湾バナナは内地移出が主であって、輸出は僅なものである、但し仕向先中門司、下関の両港は朝鮮取引をしているので相当にある、これは台湾直送より運賃関係と船便の迅速なためである

先ず移出方面の取引状況を見るに昨昭和五年中の仕向地別内訳は次の通りである(数量籠、金額円)(中略)

次に輸出方面は、朝鮮、大連、満洲、上海、福州の三方面で、その内大部分は朝鮮である、輸出不振の理由は、内地対台湾の取引関係のような確実性が薄いためであるこの取引事情は後述するとして、満洲大連方面は取引以外に寒い時期が永いため、バナナが黒色に変じ易いのと、バナナそのものが夏向きであるからである、また対岸即ち福州、天津方面は、銀暴落、日貨排斥、内乱等があつて取引上の不安多く、まして広東バナナの粗悪品が非常に安く販売されているからである、ただ輸出方面では朝鮮だけは台湾内地間の取引のような制度を設けるか、今少し確実性のある取引問屋を作り、蒸室の設備が出来得れば、将来は有望である

台湾バナナ界は内地取引には永年苦い経験を嘗めた結果と、産地同業間にも統一がなかつたため、折角の重要物産の根底を危くするような虞があつ

日本統治時代台湾産バナナの海外搬出（松浦）

たので総督府当局はこれに対し色々対策を講じ、現今では殆ど完成とまでは行かないが生産者も落ちついて仕事が出来ようになって、主産地である三州下に芭蕉組合というものが作られ、三組合の上に芭蕉聯合組合が設けられている、三組合は即ち台中、台南、高雄で、組合長は各州の内務部長、副組合長は産業方面の経験ある有力者が組合から選出されている、その下に一般生産者から選出した評議員、代議員等が設けられ、凡て合議制で行っている、組合聯合会は、会長は知事で現在は台中市にあるから、台中州知事が就任している、その下に理事がいて事務一切を掌っているそしてその取引の方法は内地問屋に委託販売をし、指値或は成行相場で売却する方法であったが、内地問屋のいうように売却されるものであるが甚だ不安であり、且代金支払遅延等の故障続出の結果、生産者に利害問題が起り不安を抱くようになったため、当局としても折角の重要物産を再び不振に陥いれてはならないと、内地取引問屋と協議の結果、中間に委託業者を設置して取引の安全公正を期することになり、ここに台湾青果株式会社が設立された、勿論この中間委託会社は産地組合員と内地問屋が株主である台湾青果会社の業務は、産地同業組合からバナナの委託を受け、会社は内地取引地に出張所を設けてその地の問屋の信用状態等を調べるのは勿論、会社と問屋が立会の上糶取引を行わしめ、同時に現金の取引を行うのである²⁸⁾。

『臺灣日日新報』昭和9年（1934）4月25日付の「バナナの輸移出高一千八百三万円 内地移出も二百万円の増 輸出に於ては三倍の激増」には次のように見られる。

殖産局特産課発表によれば昭和八年中に於けるバナナ輸移出成績は左の如くである。（中略）

之を前年中の実績に比較するときは数量に於て六六三、〇七七籠金額にして二、九一一、五三四円の激増である、即ち昭和七年は六年未及び七年初めの霜害によりバナナの出荷大いに減退し、内地移出額は二百万籠に足らず価額も亦八百三十万円程度に過ぎず、大正十三年以来の出荷減となったの

である、ところが八年は高雄州下からの出荷激増し、台中、台南兩組合も出荷を増し、殊に七年未大連汽船の本島割込により運賃の低下と配船の増加を来し、更に満洲に於ける荷受機関の確立により満洲天津方面に対し出荷激増となり前記の如き成績を挙げ得たのである、之を輸移出別に見れば、(中略)にして仕向地の主なるものを挙げれば

右につき一籠当りの平均価格を示せば東京四円五十銭、神戸四円三銭、大阪四円十八銭、下関四円、門司三円九十四銭で内地全体についての平均価格は四円四十二銭で前年より二銭高である、次に朝鮮及び海外への出荷状況は(中略)

外国輸出の七年の成績は数量一五八、二七一籠金額六二六、〇九一円であったから右の八年の成績は之に比し一九九、一二〇籠九一九、五四四円(三倍近く)の激増である、例えば満洲は八年は七年に比し三倍、朝鮮は二倍、天津及福州も二倍、厦門は二百倍という激増振りである、斯くの如く外国輸出の増加したことは、前記大連汽船の割込、従って郵商船の増配、運賃の低減(八年三月一籠当り一円十八銭から八十五銭に激減)し又昨年三月から大連市直営の中央卸売市場が開設されるや、従来の北支那青果社は満洲青果と改称して奉天に移り、又ハルビンには従来内地人当業者四、五名より成るハルビン生果共同荷受組合というのがあったが之を拡張して台湾産ハルビン青果荷受組合を造り、此の両者は共に連合会の指定問屋として活躍するに至ったことに原因している。

台湾産バナナが大連汽船会社によって台湾から中国東北部へ運ばれるようになる。

『臺灣日日新報』第12233号、昭和9年4月25日、5頁「バナナの輸移出高一千八百三十三萬圓 内地移出も二百萬圓の増 輸出に於ては三倍の激増」に、昭和8年中のバナナ輸移出成績について、

輸移出總額 数量 2,796,357籠 價格 11,831,331圓²⁹⁾

とあり、日本国内の状況は、

東京 377,394 2,398,378

日本統治時代台湾産バナナの海外搬出（松浦）

神戸	396,124	1,597,584
大阪	288,066	1,204,475
下関	281,995	1,126,967
門司	275,858	1,087,639 ³⁰⁾

1934年当時の朝鮮及び海外への出荷状況は

釜山	16,609	64,673
京城	37,744	138,385
仁川	3,210	12,519
平壤	6,981	26,811
雄基	10	12,811
安東	14,106	59,311
大連	59,141	231,274
奉天	43,728	205,930
新京	240	961
ハルビン	27,673	187,271
天津	105,587	488,538
青島	12,245	54,165
上海	45	125
福州	17,512	43,894
厦門	12,680	51,254
香港	120	239
合計	357,391	1,545,655 ³¹⁾

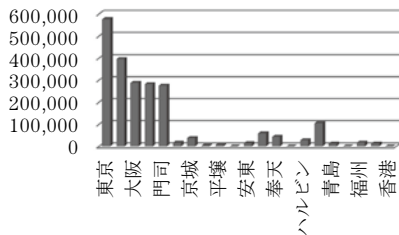


図4 1934年台湾産バナナ搬出量地域別表

とあるように、台湾産のバナナが日本のみならず、図4のように中国東北地方、天津、青島、上海、厦門、香港などの地域に搬出されていたことが知られるであろう。

『大阪時事新報』昭和9年（1934）10月21日付の「臺灣航路を挟んで商船、近郵の争覇 注目される山本の新造船争奪紐育航路の縮図化」に見られるように、日本の汽船会社とくに貨物船の問題があった。

大阪商船、近海郵船では予てその台湾航路の優秀化を図りつつあるが、特にそのバナナ積取船においてはそれぞれ助成施設による新建造船を配船して快速を競っている。即ち近郵では吾妻汽船の助成新造船神洲丸（6,389重噸，13.5節，噸当り3円30銭で2ヶ年契約）を，商船では島谷汽船の海平丸（6,600重噸，15節，噸当り3円90銭で1ヶ年契約）を備船して各々臺灣定航に配船してそのスピード化に努めている。

然して商船では目下助成施設により6,000トン型，速力16節の貨物船を三菱長崎造船所で建造中であり，他方近海郵船においても同じく助成施設を利用して同型同速力の貨物船を二隻横浜船渠で新造している，右五隻は何れも来年三月時を同じうして竣工する予定で，両社共これを臺灣航路に配船する計画であるから，その就航を見る暁には両社台湾線の快速船は商船四隻対近郵三隻となるわけである。しかして茲に問題となるのは山本汽船が三菱神戸で建造中の助成新造快速船（6,400重トン，16節）で同船も優秀なる冷蔵設備を有し，しかも竣工予定は来年3月となっている関係上，必然的に商船，近郵間にその備船競争を惹起すべく，既に猛烈な潜行運動を開始せる模様であるが，該貨物船の備船如何によって，両社臺灣航路の優秀船比率は5対3と商船が断然リードするか，或は4対4と同率になるわけである，右新造優秀船の一斉的就航によって臺灣航路の快速化は完成されその面目を一新することとなるが，同時に商船近郵の競争はいよいよ白熱化すべく，茲に臺灣線は本邦大型快速貨物船の競争場裏たる紐育線の縮図を現出するものと見作され，これが成行一般に頗る注目されている。³²⁾

大阪商船会社や近海郵船会社は，この当時の日本と台湾を結ぶ重要な汽船会社であった。近海郵船は，日本郵船会社から独立した汽船会社であり，日本と台湾との航路を日本郵船会社から引き継いでいた³³⁾。

『臺灣日日新報』昭和12年（1937）4月24日付の「臺灣航路の運賃 愈よ引上に決定 引上率は大体二割程度か 両三日中に交渉開始せん」とあるように，近海郵船松本支店長，商船中村支店長の両氏は約一ヶ月前両社共本社より臺灣航路運賃引上げの内命を受けて以来寄々協議を進めていたが，臺灣は

日本統治時代台湾産バナナの海外搬出（松浦）

特殊事情にあるのと海運界の前途見越し等のため夫々本社に対し猶予方諒解を求めていたが、以来再三値上げ催促を受けたのでこの程愈々運賃値上げの決意をなし、両社共同にて引上理由書を作成し、二十三日午後両支店長は台北鉄道ホテルに最後の重要会談をなし両三日中に辰馬、三井船舶大連汽船代表等と相携えて、通信部に泊交通局総長戸水通信部長を訪問理由書を提出諒解を求め、続いて関係荷主側を訪問運賃引上げの申出でをなし正式交渉を開始することとなった。（中略）尚現在臺灣航路の運賃協定はバナナは十二月一杯で期限が既に切れて居り、米も同様三月一杯を以て期限が切れて居り、雑貨には殆ど運賃協定の期限なく、砂糖は昨年九月に糖聯と協議の結果十月より更に満一箇年据置、石炭も昨年十月、十一月に据置を決定しているので、船会社側は先ずバナナに対しては青果聯合会に、米に対しては米穀移出商組合に、雑貨に対しては各商工会、実業会、商総会、商工協会等に対し交渉を開始するものの如く、引上率は二割位と見られている³⁴⁾。

とあるように、近海郵船の台湾と日本本土を結ぶ航路の運賃引き上げが問題となり、バナナについては青果連合会との交渉に依拠する方向にあった。

臺灣総督府殖産局が1935年9月に発行した『臺灣のバナナ産業』の「輸出状態」に、中国東北部や朝鮮半島へのバナナの輸送促進を推進している。

内地以外即ち満鮮、對岸支那方面に於ける販路擴張に對しては、從來相當の努力を拂ひ來りしが、諸種の事情に因り、其の取引數量未だ多いき見るに至らざりき。然るに昭和七年十一月大連汽船が本島航路に割込み來るに及び、本島及滿洲竝に天津間の航路は俄然活氣を呈し、優秀船の配船、船腹の増加、運賃の低下等を招來したるが、恰も滿洲國成立の結果、従前の大連の他に奉天及哈爾濱にも取引機關設置せられたると、産地側の増産に鑑み極力販路の擴張に努めたるに加へ、爲替採算上有利となりたる等の諸事由に依り、對外輸出は急速なる増加を示し、昭和九年の輸出高四十八萬七千餘籠、金額二百七圓八千餘圓に上り、前年に比し、約十三萬籠の増加を示すに至れり³⁵⁾。

さらに同書の輸送において、

バナナは元來、耐久力に乏しき果物なるのみならず、其の需要地は何れも遠隔の地なるを以て、之が輸送の良否は品質に至大の影響を有し、價格亦之に左右せらるるが故に、移出開始以來之が改善には不斷の努力を怠らざる所なり³⁶⁾。

とあるように、耐久性の乏しいバナナをいかに迅速に輸送するかが大きな問題であった。昭和10年（1935）1月から6月までの5箇月間に配船された航海数は次のものであった。

基隆・神戸線	11航海
高雄・横濱線	10航海
高雄・大阪線	10航海
高雄・大連・天津線	10航海
臺灣・満洲・朝鮮線	2航海
高雄・福州・上海線	3航海
基隆・福州線	3航海
基隆・香港線	4航海
高雄・廣東線	2航海
計	55航海 ³⁷⁾

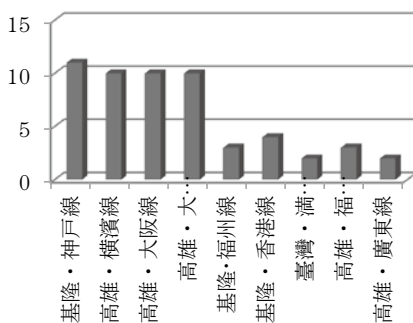


図5 1935年1-6月台湾バナナ積載船渡海度数

基隆、高雄を中心に図5に示したように日本の神戸、横濱、大阪への輸送が約150日間に31航海、天津・東北方面に12航海、中国の上海以南に6航海、香港、廣東へ6航海の航運が行われていた。

4 小 結

上述したように、日本の台湾統治時代においてバナナは重要な青果物として成長をとげ、昭和初期には台湾産青果の日本への移出としてバナナが全青果物の99%台を示し、他の青果物を圧倒していた。そのバナナの産地として台中が70%台の産出額を供給し、台湾産バナナの日本移出量の約30%が東京に、30%弱が神戸に搬出され、おおよそ4割近くが関東方面に、6割ほどが関西

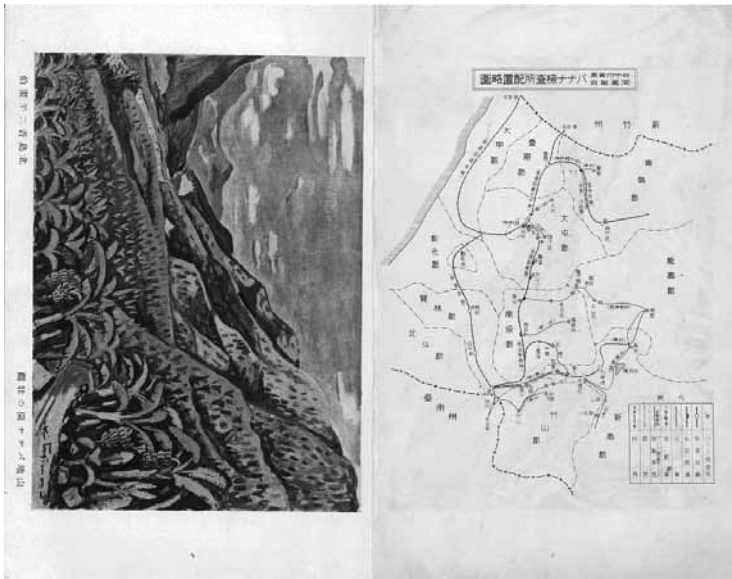
日本統治時代台湾産バナナの海外搬出（松浦）

以西の地域に搬出されていたことが知られる。さらに、海外として東アジア地域に搬出され、日本の統治した朝鮮半島や中国東北部においても重要な青果物として販出され食卓を賑わせていた。さらに中国の天津、青島、上海、福建、香港などへも販路を拡大し、汽船によって搬出されていたことが知られる。

これらの地域の販出に際する重要な輸送機関が汽船であった。とくに重要な輸送航路が基隆と高雄から出港する日本の神戸、横濱、大阪への輸送航路であり、天津・東北方面の航路、ついで中国の上海以南の航路と香港や廣東への航路がそれに次いでいた。これらの航路の目的地が、同時に台湾産バナナの重要な搬出地であったのである。

末尾に1940年2月の臺中青果同業組合の『台中バナナ』を〔附載資料〕として全文影印した。同パンフは現在では図書館等では希有の資料であり、日本統治時代の台湾産バナナの動勢を知る貴重な資料として附した。なお文中の横ラインは古書店購入時のままである。

【附載資料】『台中バナナ』臺中青果同業組合，1940年2月11日発行。



また三千字前後の小冊子種は矢張りお傳く其の宛に

の宛には宛の宛はありませぬ

前記の様に宛分に於てバナナは可成り向本に迫つて

居る出来よりもウイタミンを豊富に含んで居ります

バナナは非常時に於て其の代用になるかとの研究

究まで進んで居ました かなればバナナは野菜

類でバナナ類でもめて中食位簡単に済ませること

が出来たのでから今バナナこそは究非常時

日本食糧問題を貫きつて立つものだと云へませぬ

此の問題に實際に關したるは東京の大蔵省當時で

故市に第1に食糧に於てバナナで命を助し居るに於て

と云ふ算盤が多し其の後の東京市の

バナナ消費量は一人當り一日一石と云ふ数字を示

す

これはバナナと海苔の相違と云ふ事になり

バナナが、かつと海苔のアワカシの地方の人は海

食物はバナナと海苔を結び合せて食べてゐるとの

事ですが、その上人は其の二百五歳位生きて

あるとの事、バナナを食料としてゐると云つて

あるとの事とか海苔の集積になつたと云つて

明かされて居るが不潔にナツカシには、こん

な病氣の者が居ります ユーロピヤ市のメウ

アリスビルの杉田博士の論文を見ますと、バナ

ナを動物に食べさせて置くに於て治すべくと

云ふのです バナナと海苔を結び合せて

ゐる事ですが、バナナが主役に代用せらるゝ時が

来るに違ひありません



蕉のバナナ

して居ります。既にハワイでは勿論バナナは昔出居ります

が小冊子が二冊のバナナを持つて學校へ行き申食の

代用にして居ます。

向島くバナナは後南の南洋物とか、其の他が

の南洋を思ふとか云はれ、又と云つて居られるが

もある事ですね、これは正確な問題で居る

南洋物でも、南洋物も、南洋物も、南洋物も

南洋物も、南洋物も、南洋物も、南洋物も

南洋物も、南洋物も、南洋物も、南洋物も

南洋物も、南洋物も、南洋物も、南洋物も

南洋物も、南洋物も、南洋物も、南洋物も

南洋物も、南洋物も、南洋物も、南洋物も

南洋物も、南洋物も、南洋物も、南洋物も

南洋物も、南洋物も、南洋物も、南洋物も

南洋物も、南洋物も、南洋物も、南洋物も

南洋物も、南洋物も、南洋物も、南洋物も

南洋物も、南洋物も、南洋物も、南洋物も

南洋物も、南洋物も、南洋物も、南洋物も

南洋物も、南洋物も、南洋物も、南洋物も

南洋物も、南洋物も、南洋物も、南洋物も

南洋物も、南洋物も、南洋物も、南洋物も

太陽とバナナ

下田吉人

(一)

バナナの栄養については、殊に其の豊富を言ふ事

までもあるまい。蛋白質も多し、糖分も多し。各

種のウイタミン類も豊富で、しかも消化吸収も佳良

であるといふ。果物中では栄養價から第一に位す

るのである。この豊富な果物が、かくも人

に益國中で消費されてゐる事は、國民の健康にま

ことに喜ばしい事である。

然し、私はもう一つバナナの普及についての喜

びを感じる。それはバナナが太陽のエネルギーを

受けて居るからである。

バナナは、太陽の光を最もよく吸収して人間に

使へる。あらゆる太陽の恩恵を最もよく人間に

使へる。あらゆる太陽の恩恵を最もよく人間に

使へる。あらゆる太陽の恩恵を最もよく人間に

使へる。あらゆる太陽の恩恵を最もよく人間に

使へる。あらゆる太陽の恩恵を最もよく人間に

使へる。あらゆる太陽の恩恵を最もよく人間に

使へる。あらゆる太陽の恩恵を最もよく人間に

使へる。あらゆる太陽の恩恵を最もよく人間に

使へる。あらゆる太陽の恩恵を最もよく人間に

使へる。あらゆる太陽の恩恵を最もよく人間に



蕉のバナナ

(二)

バナナは、太陽の光を最もよく吸収して人間に

使へる。あらゆる太陽の恩恵を最もよく人間に

使へる。あらゆる太陽の恩恵を最もよく人間に

使へる。あらゆる太陽の恩恵を最もよく人間に

使へる。あらゆる太陽の恩恵を最もよく人間に

使へる。あらゆる太陽の恩恵を最もよく人間に

使へる。あらゆる太陽の恩恵を最もよく人間に

使へる。あらゆる太陽の恩恵を最もよく人間に

使へる。あらゆる太陽の恩恵を最もよく人間に

使へる。あらゆる太陽の恩恵を最もよく人間に

使へる。あらゆる太陽の恩恵を最もよく人間に

使へる。あらゆる太陽の恩恵を最もよく人間に

使へる。あらゆる太陽の恩恵を最もよく人間に

使へる。あらゆる太陽の恩恵を最もよく人間に

使へる。あらゆる太陽の恩恵を最もよく人間に

使へる。あらゆる太陽の恩恵を最もよく人間に

使へる。あらゆる太陽の恩恵を最もよく人間に

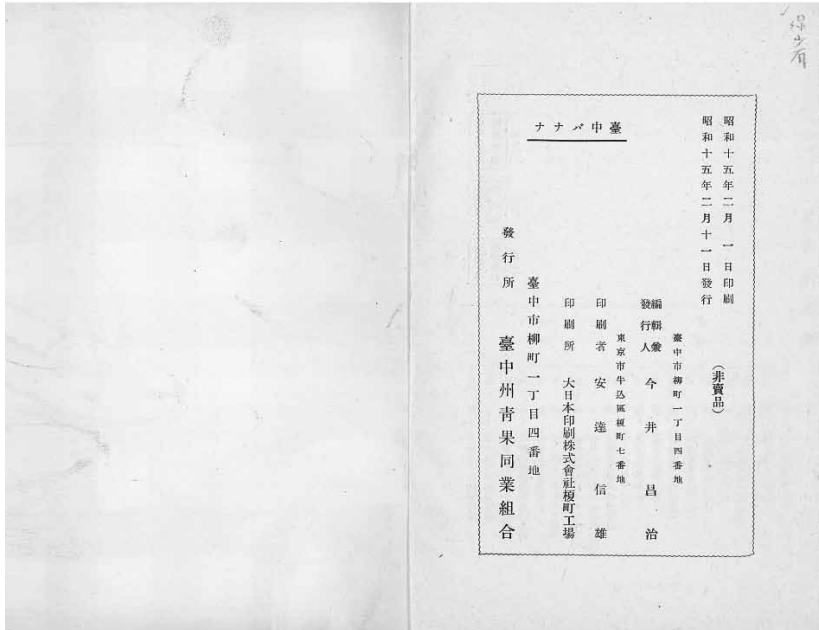
使へる。あらゆる太陽の恩恵を最もよく人間に

使へる。あらゆる太陽の恩恵を最もよく人間に

使へる。あらゆる太陽の恩恵を最もよく人間に

使へる。あらゆる太陽の恩恵を最もよく人間に

日本統治時代台灣產バナナの海外搬出（松浦）



日治時代台灣產香蕉的海外輸出

摘要：香蕉是日治時代臺灣的特色產品之一。但是很少有人知曉有關日治時代臺灣產香蕉是如何輸出到包括日本在內的海外地區的相關狀況。臺灣產香蕉是以臺中地區等主要香蕉生產地為中心，並依靠汽船分別從基隆和高雄運送至日本的神戸，橫濱，大阪，中國大陸方面則主要運送至天津和東北地區，上海以南的沿海地區，以及香港和廣東南部。

故此，本文意在闡明日據時代臺灣香蕉的海外出口的相關狀況。

關鍵詞：日治時代 臺灣 香蕉 Banana 海外出口

注

- 1) 『臺灣日日新報』大正12年(1923)7月16日,「臺灣及び臺灣中心の航路 東西南北縦横の航路網を見よ」。
- 2) 臺灣総督府殖産局編『臺灣の芭蕉産業』臺灣総督府殖産局,1930年10月,1頁(全46頁),『台湾の産業・物産』アジア学叢書238,大空社,2011年4月所収。
- 3) 鶴見良行『バナナと日本人—フィリピン農園と食卓のあいだ—』岩波書店・岩波新書黄版199,1982年8月第1刷,2009年4月第53刷,1-2頁(全230頁)。
- 4) 中村三八夫は,明治33年(1900)に誕生し,九州大学農学部で園芸学を修め,その後,台北帝大理農学部助教授となり,戦後,しばらく台湾大学農学院教授として台湾で留用され,日本に帰国後に大阪府立浪速大学(大阪府立大学)農学部で果樹園芸学講座の主任となったが1950年10月に死去している。その成果に『世界果樹図説』(農業図書株式会社,1978年11月,全528頁)がある。
- 5) 中村三八夫『南方圏の熱帯果樹』臺灣青果同業組合聯合會,1943年2月,144(1-216)頁
- 6) 中村三八夫『南方圏の熱帯果樹』147頁。
- 7) 中村三八夫編『世界果樹図説』農業図書株式会社,1978年11月,445頁。
- 8) 『臺灣日日新報』第7948号,大正11年(1922)7月14日,「食物談」。
- 9) 『時事新報』東京,大正元年(1912)9月17日-10月1日に掲載。
- 10) 『臺灣日日新報』第6435号,大正7年(1918)5月23日,「臺中特訊」。
- 11) 今井昌治編輯『臺中バナナ』臺中州生か同業組合,1940年2月,1-31頁。
- 12) 今井昌治編輯『臺中バナナ』臺中州生か同業組合,1頁。
- 13) 『臺灣日日新報』第7339号,大正9年11月12日,3頁。
- 14) 『臺灣日日新報』第7342号,大正9年11月16日,3頁。
- 15) 『臺灣日日新報』第9340号,大正15年(1926)5月6日,4頁。
- 16) 高木一也『バナナ輸入沿革史』日本バナナ輸入組合,1967年8月,17-18頁(全302頁)。
- 17) 高木一也『バナナ輸入沿革史』日本バナナ輸入組合,59-60頁。
- 18) 今井昌治編輯『臺中バナナ』臺中州青果同業組合,1940年2月,9頁。
- 19) 『臺灣日日新報』第9662号,昭和2年3月24日,「沖繩バナナの割込計畫 品質は臺灣よりも劣る」。
- 20) 『東京朝日新聞』第14639号,昭和2年(1927)2月19日,4頁。
- 21) 『臺灣日日新報』10872号,昭和5年7月22日,「自己生産のバナナを朝鮮や上海に捌く 目覚めが潮州の有力者 本春から会社を設立して」。
- 22) 『神戸又新日報』昭和8年(1933)10月20日,「満洲国の交通網確立への大評定 内,鮮,満,台の当局連乗集し連絡運輸の会議」。
- 23) 『臺灣日日新報』第13777号,昭和13年7月28日,「將來のバナナ輸出 百萬籠を目標に 満支朝鮮の販路視察 猪股青果會社常務談」。
- 24) 高木一也『バナナ輸入沿革史』日本バナナ輸入組合,1967年8月,53-54頁。

日本統治時代台湾産バナナの海外搬出（松浦）

- 25) 『臺灣日日新報』昭和9年（1934）4月30日、「満洲市場と臺灣の青果物 統制と斡旋機 関次第で前途頗る有望」。
- 26) 『大阪毎日新聞』第15075号、大正14年（1925）5月14日、9頁。
- 27) 『中外商業新報』昭和6年（1931）3月7日
- 28) 『中外商業新報』昭和6年（1931）3月7日-3月12日掲載「バナナ産業と移輸出状況（一） 移輸出年額千百余万円砂糖、米と並び立つ」。
- 29) 『臺灣日日新報』第12233号、昭和9年4月25日、5頁
- 30) 『臺灣日日新報』第12233号、昭和9年4月25日、5頁
- 31) 『臺灣日日新報』第12233号、昭和9年4月25日、5頁
- 32) 『大阪時事新報』昭和9年（1934）10月21日、「臺灣航路を挟んで商船、近郵の争覇 注目される山本の新造船争奪紐育航路の縮図化」。文中の漢数字をアラビア数字に改めた。
- 33) 松浦章『近代東アジア海域の人と船—経済交流と文化交渉—』関西大学出版部、2014年12月、276-304頁。
- 34) 『臺灣日日新報』昭和12年（1937）4月24日、「臺灣航路の運賃 愈よ引上に決定 引上率は大体二割程度か 兩三日中に交渉開始せん」。
- 35) 臺灣総督府殖産局編『臺灣のバナナ産業』臺灣総督府殖産局、1935年9月、50頁（全74頁）。『台湾の産業・物産』アジア学叢書238、大空社、2011年4月所収。
- 36) 同書、54頁。
- 37) 同書、56頁。